

ドイツ語学における形態論の分析手法について

—— 複合と派生を手がかりに ——

野 間 砂 理

1 はじめに

形態論の研究は造語論と語創造の2つに大別できる。Bußmann (1983: 587, 591) では、既存の言語要素を基にして造られた、新しい複合的な語の振る舞いや規則を考察するのが造語論であるのに対し、ある特定の意味を表現するために使われた、一度限りの音の連続としての語を考察するのが語創造であると定義されている。本論では、形態論の中でも前者の造語論を対象とする。

Grimm (1826) は自身の5冊から成る文法書の1冊を造語論に充てており、その中で言語の変化と語源は文法において考察されなければならないと主張している。それと同様に、通時的観点から造語論を研究したのが Wilmanns (1899) である。Wilmanns (1899) は、語が形成される際の道筋を探求することが造語論の課題であると説いている。それに対し、Fleischer (1972) は共時的観点から、すでに言語にある語の造語構造の分析に重きを置いている。ここで Fleischer (1972) のいう造語構造の分析とは、あくまで語の内部を音韻・形態・意味的な観点から記述的に分類することを意味する。その後、Motsch (1981)、Gallmann (1990)、Eichinger (2000) などが生成文法を語の内部にも適用した分析案を提示する。彼らは、語にはレキシコンに記載されているような語彙的な語だけではなく、統語レベルで生産的に生成されている語類があることを指摘している。本論では、実際に擬似接辞、形態と意味構造のミスマッチ、統語レベルで生成される複合形容詞という3つの言語現象を通してドイツ語学における造語論研究の現況を概観し、上述の造語論研究の課題に対してどのような成果が得られたかを検証する。また、そこから導き出された造語論研究における今後の課題を提示することも本論の目的である。

2 複合と派生の境界線上に位置する語類の分析例

Duden (2006) によれば、ドイツ語の造語法には Komposition (複合)、Derivation (派生)、Konversion (品詞転換)、Rückbildung (逆成)、Kurzbildung (語縮約)、Doppelung (重複)、Wortkreuzung (語交差)、Partikelverbbildung (不変化詞¹⁾ による動詞形成²⁾ などがあるが、生成された語の構造および文法的性質に基づき、これらの造語法は2つ以上の自由形態素あるいは1つの自由形態素を基に生成されるもの、そして品詞の交替があるものとないものの4つに

大別できるとしている。しかし、レキシコンに掲載されている語の多くが、上述の造語法に疑念の余地なく分類できるわけではないため、先行研究では生成過程が曖昧な語類を抽出し、それらのデータに新たな定義を設けたり、既存の造語法を定義し直すなどの試みがなされた (Fleischer: 1976, Öhlschläger: 2008)。以下では、複合と派生の境界線上に位置する語類2つにおける分析例の梗概を述べ、そこから造語論研究の問題点を導き出す³⁾。

2.1 擬似接辞

形態的には自由形態素であるが、その意味や機能が接頭辞あるいは接尾辞のように振る舞う自由形態素を擬似接辞 (Halbaffix) という⁴⁾。

- (1) a. Laubwerk
- b. Gesamtheit der Blätter eines Baumes, Strauches
- c. *das Werk des Laubs

(1a) では、自由形態素 *Laub* が、同じく自由形態素 *Werk* と結合しており、形態的には複合語と見なすことも可能である。しかし、この複合語の中で、*Werk* はもはや「仕事・行為・作品」という自由形態素本来の意味を忠実に保持しておらず、(1b) における語彙的パラフレーズが示す通り、「全体・集まり」という抽象的な意味へと変化を遂げている。そして (1c) のように属格名詞によるパラフレーズが許容されないことで、自由形態素の意味との差異はより説得性を帯びてくる。当該語類は、意味的そして機能的に独立した2つ以上の自由形態素が結合しているため、形態的には複合という造語法に分類される。しかし、造語をなす一部分の自由形態素の意味が薄れ、特定の抽象的な意味において用いられるだけでなく、自由形態素と結合し極めて生産的に語を生成することから、その機能は接辞に近似している。複合あるいは派生という2つの明示的な造語法のちょうど中間に位置する語類に対し、擬似接辞という新たな概念による分析案を提示した先行研究を考察しよう。

擬似接辞という概念を導入した Fleischer (1976) は、以下の4つを擬似接辞の基準としてあげている。

- (2) ①生産性 ②意味の希薄化 ③意味核の転位 ④同音同形異義語化

まず、生産性は接辞にとって必要欠くべからざる条件である。文文化現象 (秋元: 2002) に関する研究では、言語単位は語彙的要素から機能的要素に至るまで連続線上に並んでおり、言語

表現の出現頻度が高ければ高いほど習慣化しやすい傾向にあると指摘されている。従って、ある言語表現の生産性が増していれば、そこで今後生じる文法化現象（自由形態素から接辞への移行）を予測することが出来るかもしれない。

次に、Fleischer (1976) は、接辞化しつつある語彙素は本来の意味を忠実には保持しておらず、そこにはすでに意味の弱化あるいは縮小化が認められるとしている。ただし、Fleischer (1976) は、あくまで自由形態素と擬似接辞の意味上の差異を列挙するに留まっている。しかしそうした記述は、擬似接辞としての意味が自由形態素の主要な意味とは異なっていることを示すだけであり、擬似接辞としての意味がどのような派生経路を辿り自由形態素とは異なる意味で用いられるようになったのか、即ち擬似接辞としての機能が生じるに至った要因は何かを特定することはできない。

3つ目に挙げられる基準は意味核の転位である。語彙素がより機能的になることで、接辞が意味の主要部を担わないのと同様に、擬似接辞においても、意味の中心部が他の自由形態素に転位する。さらに Fleischer (1976) は、意味核の転位が同音同形異義語化という極めて長期的なスパンで起こりうる現象であると主張しており、そこから4つ目の特徴が導き出される。

Fleischer (1976) は自由形態素が一方では依然として自由形態素のまま用いられるが、他方では同音同形のまま接辞化しており、それを完全に接辞と認定しうるまでの移行領域を設けている。また、Fleischer (1976) は、長い期間を経て起こりうる現象であるため、該当する語類の生産性や意味の差異を精密に調べた上で、それぞれの語に対応する接辞化の度合いを設定することを提案している。

以上のことから、Fleischer (1976) は、自由形態素を通時的な観点から考察することで、これまで看過されてきた接辞のような振る舞いをする語類の特徴を提示したと言える。しかし裏を返せば、共時的なデータを通時的に説明するという姿勢が、言語現象を捉える視点の区別が曖昧であるとの批判を受ける原因となっていることも事実である (Schippan: 1978, Schmidt: 1987, Olsen: 1986)。また、接辞化しつつある語彙素には、確かに意味の弱化あるいは縮小化が認められるが、Fleischer (1976) は意味の差異を列挙するに留まっており、それを説得的に証明する方法を見出していない。さらに、意味核の転位は同音同形異義語化という極めて長期的なスパンにおいて起こりうる現象であり、それを擬似接辞の判断基準とすることはできないだろう。

以下では、擬似接辞の具体的な分析例のうち、Weinrich (1993) による擬似接辞の意味分類を概観する。Weinrich (1993) では、擬似接尾辞に該当するとされる形容詞44個を意味的な観点からのみ分析し、以下の5つに分類している。

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| (3) a. 程度を表す擬似接辞 | eindrucksvoll (印象深い) |
| b. 同等性または類似性の擬似接辞 | wortgetreu (文字通りの) |
| c. 態度の擬似接辞 | schadenfroh (他人の不幸を喜ぶ) |
| d. 処理可能性の擬似接辞 | versandfertig (発送準備ができた) |
| e. 位置付けの擬似接辞 | küstennah (岸辺に近い) |

程度を表す擬似接辞 (3a) では、第一構成要素によって表される事態が100%肯定される場合 (-voll, -reich) と100%否定される場合 (-los, -frei) の両端があり、その事態がこの両端のどの辺りに位置するかを第二構成要素である擬似接辞が規定する。また、肯定も否定も出来ないような場合には、-arm などの擬似接辞が用いられる。(3b)に該当するのは -getreu, -gleich などで、これらの擬似接辞は第一構成要素の意味を補完しているものの、特別な意味を付与しているのではなく、第一構成要素とまさに同一であるか、あるいは同類であることを特徴付けている。次に、ドイツ語において最も多く観察されるのが態度の擬似接辞 (-lustig, -froh) である。この種の擬似接辞は、動詞あるいは動詞派生の名詞と結合し、「喜び・好き嫌い」など、人間が自身や他人の言動に対して取る態度を描写する際に用いられる。この他にも、主に動詞と結合し、行為に対する話し手の対処の可能性を表す場合がある。話し手がその行為を遂行可能であれば -bereit または -fähig が、不可能であれば -unfähig を、またその行為が義務的であれば -pflichtig や -würdig が用いられる。これらの語類を Weinrich (1993) は処理の可能性を表す擬似接辞 (3d) と名付けている。(3e) では、対象となる事物と第一構成要素との位置関係を表す擬似接辞であり、-nah, -fern, -intern, -extern 等が該当する。

以上のように、Weinrich (1993) は擬似接辞の意味機能に特化した分析案を提示した。しかし、上記の形容詞を擬似接辞に認定し、例えば *Werk* や *Wesen* のように接辞的な名詞を接尾辞と見なしていることに関しては何ら説明がなされていない点は問題である。どのような基準により擬似接辞と認定するかは、意味分類の前段階として規定しなければならないだろう。

擬似接辞という新たな概念が Fleischer (1976) によって導入された後、Schmidt (1987)、Kühnhold / Putzer / Wellmann (1978)、Fleischer / Barz (1995)、Weinrich (1993)、Lachachi (2008) などによって研究が進められた。しかし近年では、擬似接辞という概念を導入した Fleischer / Barz (2007) 自身が、擬似接辞という曖昧な概念を排除し、造語構造における構成素は、語か接辞のいずれかであると規定している。ところがその一方で、語にも接辞にも中心 (Zentrum) と周辺 (Peripherie) があるとし、「接辞的な特徴を持った自由形態素」と「接辞の特徴を全ては備えていない (自由形態素由来の) 接辞」といった語類の存在を主張しているのである。これに従えば、それまで擬似接辞として捉えられていた -werk や -wesen

などは接辞としての特徴がすでに強いため接辞に、そして自由形態素 *Werk* と *Wesen* は同音同形異義語として分析されている。そして、専らそれらの語類が結合する品詞の特定、ならびに接尾辞としての意味機能の分析に重きが置かれている。

以上のことから、近年では擬似接辞という概念はもはや支持されなくなり、再び「自由形態素」と「接辞」に二分化している。そもそも複合と派生の境界線上に位置する曖昧な語類に対し、十全な定義を設けることは困難であるので、擬似接辞と自由形態素が持つ本来の意味との差異をパラフレーズなどを援用して記述し、なぜそのような意味の希薄化が生じたのか考察しなければならない。さらには、擬似接辞に似た意味の接尾辞がすでにあるにも関わらず、敢えて自由形態素を擬似的な接辞として用いる要因は何か、調査することが必要である。

2.2 形態と意味構造のミスマッチ

前節では自由形態素が接辞的な意味と自由形態素の意味の両方を担う擬似接辞を取り上げた。この語類においては意味の区別のみが問題になるのに対し、本節で扱うのは派生語の形態構造がその意味構造と合致しない *-ig* 型および *-lich* 型派生形容詞である。一見すると、*-ig* および *-lich* 型形容詞は明示的な派生形容詞であるように見えるが、その音韻・形態・意味構造にはミスマッチが観察される。本節では、ドイツ語の接尾辞 *-ig* と *-lich* が語基に与える意味的特徴の差異および共通点を扱った先行研究4つを取り上げ、そこから造語論研究の問題点を抽出する。

Duden (2007) は、接尾辞 *-ig* と *-lich* の意味的な競合関係を、時の添加語とそれ以外の語類に分け考察している。

- | | |
|---|------------|
| (4) a. dreistündig (drei Stunden lang) | 「時間の持続」 |
| b. dreistündlich (alle drei Stunden) | 「特定の期間の反復」 |
| (5) a. ein verständiges Kind (ein Kind, das etwas versteht) | 「何らかの性質」 |
| b. ein verständlicher Text (ein zu verstehender Text) | 「関連性」 |

drei Stunden (3時間) に接尾辞 *-ig* が付加されると (4a)、「3時間に及ぶ」という意味の形容詞が作られるのに対し、接尾辞 *-lich* が添加されると (4b)、「3時間毎の」という意味の形容詞が生成される。即ち、時の添加語は接尾辞 *-ig* によって時間の持続を、接尾辞 *-lich* によって特定の期間の反復を表す形容詞を作り出すことができる。それに対し、時の添加語以外で接尾辞 *-ig* と *-lich* 型形容詞が競合する場合、*-ig* 型形容詞は何らかの存在 (das Vorhandensein von

etwas) を表すのに対し、*-lich* 型形容詞は後続する名詞との関連性 (Bezug) を表すと Duden (2007) は指摘している。確かに、時の添加語における意味上の差異は明白であるが、それ以外の語類については「存在」と「関連性」という抽象的な概念によって捉えられているだけであり、その区別は必ずしも判然としないばかりか、反例も観察される (*geschäftig* vs. *geschäftlich*, *gütig* vs. *gütlich*)。そこで、以下では *-ig* と *-lich* の競合関係ではなく、それらの形態的特徴を個別に分析している先行研究を取り上げる。

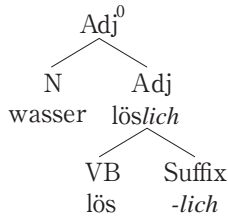
Fleischer / Barz (2007) では、*-ig* および *-lich* 型派生形容詞における語基の品詞を分類している。

(6) a. [名詞 + <i>-ig</i>] 型の形態的特徴 ⁵⁾	b. [名詞 + <i>-lich</i>] 型の形態的特徴 ⁶⁾
- <i>S-ig</i>	<i>fleißig, geizig</i> - <i>S-lich</i> <i>täglich</i>
- <i>S(S, S)-ig</i>	<i>brandfleckig</i> - <i>S(S₁, F, S₂)-lich</i> <i>arbeitsgerichtlich</i>
- <i>S(Adj/Num, S)-ig</i>	<i>achtbeinig</i> - <i>S(Adj, S)-lich</i> <i>hochsommerlich</i>
	- <i>S(Adv, S)-lich</i> <i>jetztzeitlich</i>
	- <i>S(P, S)-lich</i> <i>urzeitlich</i>

接尾辞 *-ig* (6a) は、単一語としての名詞、あるいは (名詞 + 名詞) と (形容詞 / 数詞 + 名詞) で形成される複合名詞が語基となりうる。それに対し、接尾辞 *-lich* (6b) は、*-ig* 型と同様に単一語としての名詞と結合するだけでなく、(名詞 + 接中辞 + 名詞)、(形容詞 + 名詞)、(副詞 + 名詞)、(接頭辞 + 名詞) のように複合語としての名詞との結合が特徴的である。確かに、この品詞分類により接尾辞 *-ig* よりも *-lich* の方が派生語の語基である複合語の結合方法が多様であるということが判明したが、その差が何に起因するのか考察されなければならないだろう。また、これまで語彙化されたデータが形態・音韻・意味の観点から細密に分類されているものの、今後新たに生成される語がどちらの接尾辞を選択するか予測することができないのは問題である。

Duden (2007) および Fleischer / Barz (2007) では、共に接尾辞 *-ig* 型および *-lich* 型形容詞を一義的に派生語であると見なしている。しかし近年の研究では、パラフレーズによる個々の語彙素の最小限の意味的な繋がりを考察し、最終段階において結合した構成要素により、複合語あるいは派生語のどちらかに規定するといった分析案が提示されている。

- (7)
- wasserlöslich*
- = im Wasser
- löslich*
- (Öhlschläger: 2008)



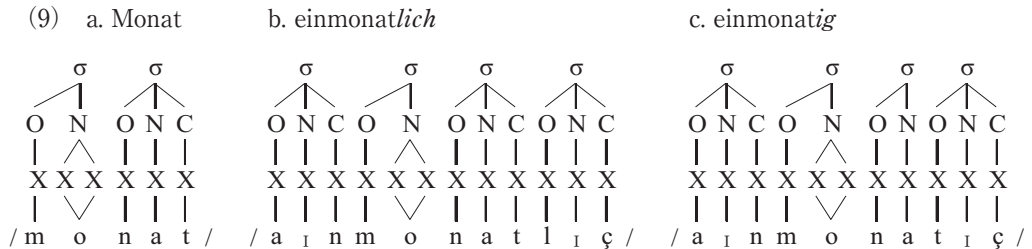
Öhlschläger (2008) の分析によれば、*wasserlös* を形容詞化するために接尾辞 *-lich* を付加したのではなく、第一段階で *lös* に接尾辞 *-lich* が付加され派生形容詞 *löslich* (溶ける) が形成され、その意味を規定するために名詞 *wasser* (水) が結合することで複合形容詞が生成される。確かに、造語論研究において問題となるのは、意味と形態構造のミスマッチにより、複合や派生など、既存の造語法に合致しないことが主であり、この分析によってそうした問題は解消できるかのようにも思える。しかし、この分析手法では個々の例で派生か複合かをパラフレーズ関係によりそのつど読み取る必要があり体系的な予測が導けない。また、*zweisprachig* や *einmonatig* のような場合、*zwei* と *-sprachig*、*ein* と *-monatig* から成り立つ複合語であると分析できないのは問題である。以下では、形態と意味構造の不一致という問題を複合や派生という既存の造語法の再分析に解決の糸口を求めるのではなく、当該語類の造語過程を考察することで、こうした形態と意味構造の不一致が生じる原因が何かを考察した先行研究を概観する。

野間 (2011) は、*-ig* および *-lich* 型形容詞における語基の形態および意味的特徴からデータを下記の4タイプに分類している。

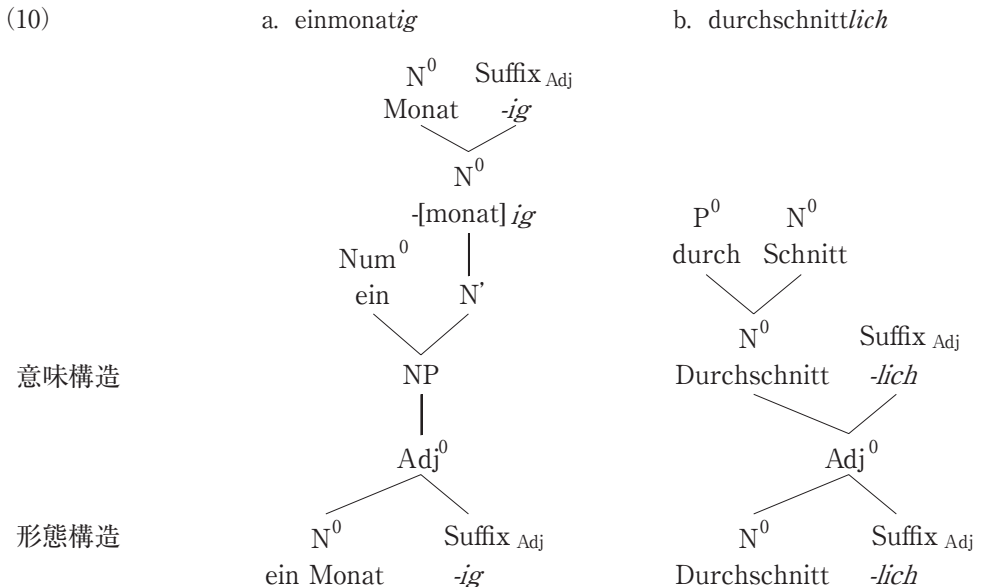
(8)	I. 競合関係にある語類	II. 競合関係にない語類
(A) <i>X-ig</i> — <i>X-lich</i>	11	0
(B) [<i>Y+X</i>] <i>ig</i> — [<i>Z+X</i>] <i>lich</i>	3	1
(C) [<i>Y+X</i>] <i>ig</i> — <i>X-lich</i>	0	14
(D) <i>X-ig</i> — [<i>Y+X</i>] <i>lich</i>	0	8
総 数	14	23
	37	

- (8) I. (A) *X-ig* — *X-lich* *leidig*-*leidlich*
 (B) [*Y+X*]*ig* — [*Y+X*]*lich* *verständlich* - *verständlichlich*
- II. (B) [*Y+X*]*ig* — [*Z+X*]*lich* *dreisätzlich* - *vorsätzlich* (**sätzlich* - **sätzlichlich*)
 (C) [*Y+X*]*ig* — *X-lich* *einmonatig* - *monatlich* (**monatig* - *einmonatlichlich*)
 (D) *X-ig* — [*Y+X*]*lich* *kundig* - *naturkundlich* (**kundlichlich*)

(8IAB) では、*-ig* および *-lich* 型形容詞の語基が完全に一致し、(8IIBCD) では、語基の第二構成要素のみに競合性が見られるタイプである。野間 (2011) では、最も多くのデータが観察された (8IIC) のデータに着目し、まずは派生形容詞が形成される際の音節構造の変化の有無を生成音韻論に基づき考察している⁷⁾。



基底となる *Monat* の音節構造 (9a) に語頭の *ein* さらには接尾辞 *-lich* (9b) と *-ig* (9c) を付加すると、接尾辞 *-lich* は母音 /ɪ/ を音節核として前後にオンセットとコーダを伴うため、他の音節を崩すことなく1つの音節を形成する。それに対し、接尾辞 *-ig* はすでに形成されている前の語の語末音節コーダを取り去り、それをオンセットに組み替え新たな音節を形成する。野間 (2011) では、こうした *-ig* および *-lich* 型派生形容詞の音節構造の決定的な差異が、(10) の構造が示すように、派生語の語基の形態と意味構造のミスマッチに繋がると分析している。



(10) のように分析する根拠を野間 (2011) では2つ挙げている。まず1つ目は、接尾辞の意味特性である。もし、*einmonatig* および *einmonatlich* の形態および意味構造の構成の仕方が同じならば、両者の語基 (*einmonat*) が完全に一致する以上、意味上の差異が接尾辞 *-ig* と *-lich* によってのみ表されうる。そうした場合、「持続と反復」という意味が競合関係にある全ての派生形容詞 (8IA: *leidig-leidlich*, 8IB: *verständlich-verständlich*) においても同様に観察されなければならないと主張している。そして2つ目は、*monatlich* に結合する数詞である。*monatlich* は自由形態素でありながら、*ein* のような数詞を取り込むことができるが、*monatlich* と *einmonatlich* は共に「毎月の」という意味であり、実際には *monatlich* にも数詞 *ein* の意味が含まれている。この観察事実から野間 (2011) では、数詞 *ein* は必須項ではない限り、名詞 *Monat* の補部ではなく、その指定部に位置するのが妥当であるとの見解を示している。こうした分析を (8) のデータに適用した結果が (11) である。

(11)	形態的特徴	意味的構造	<i>-ig</i>	<i>-lich</i>
	[X+Y]Suffix	[X+Y]Suffix	15 (30, 6%)	22 (73, 3%)
	[X+Y]Suffix	X+[Y-Suffix]	34 (69, 4%)	8 (26, 7%)

接尾辞 *-ig* は形態と意味の特徴が合致しないタイプの方が多く、*-lich* の場合との差は大きい。そのため、野間 (2011) では、*-ig* 型は主に名詞と結合して形容詞 [Yig] を形成し、その形容詞を規定するために1語 [X] を加えるのに対し⁸⁾、*-lich* 型は派生語の語基である複合語 [X+Y] がまず派生され、それを形容詞化するために接尾辞 *-lich* が用いられていると結論付けている。

第2節では、擬似接辞ならびに形態と意味構造に不一致が見られる接尾辞 *-ig* および *-lich* 型派生形容詞を扱った先行研究を概観した。伝統的な造語論は、既存の造語法に合致しない語類に対し、新たな概念での説明を試みるか、あるいは既存の造語法の定義を替えることで新たな記述の可能性を探る研究が主体であった。しかし、たとえ定義の再考を試みたとしても、形態レベルに例外は付き物なので、結局のところ既存の定義で分類できた語類が新たな定義により説明できなくなる可能性も否めない。従って、今後は定義の再考による語類の再分類に重きを置くのではなく、野間 (2011) で示したように、なぜそのような曖昧な語類が生じるのか、その原因を突き止めることが必要だろう。

3 統語レベルで生成される複合形容詞

語彙的なデータが大多数を占める一方で、若干ではあるが、形態レベルではなく統語レベルで生成されていると思われるデータが観察される。その中でも、本節では過去分詞形複合形容詞⁹⁾ を分析した先行研究を考察する¹⁰⁾。

(12) から (16) の例文が示すように、Wilss (1986) は過去分詞形複合形容詞の基底文をパラフレーズによって明確化した。

(12) a. augenverbundenes Mädchen

a'. Das Mädchen trägt einen Augenverband.

b. geschwindigkeitsbegrenzte Schnellstraße

b'. X hat die Geschwindigkeit auf der Schnellstraße begrenzt.

(13) a. neonbeleuchteter Raum

d. y ist durch x beleuchtet

b. x beleuchtet y

e. y ist x-beleuchtet

c. y ist durch x beleuchtet worden

f. x-beleuchtetes y.

(14) a. spannungsgeladenes Spiel

e. y ist mit z geladen

b. x lädt y mit z

f. y ist z-geladen

c. y ist durch x mit z geladen worden

g. z-geladenes y.

d. y ist durch x mit z geladen

(15) a. hormongeschützte Frauen

d. y ist von x gegen z geschützt

b. x schützt y gegen z

e. y ist x-geschützt

c. y wird von x gegen z geschützt

f. x-geschütztes y.

(16) a. ein windgeschütztes Plätzchen

e. y ist gegen z geschützt

b. x schützt y gegen z

f. y ist z-geschützt

c. y wird von x gegen z geschützt

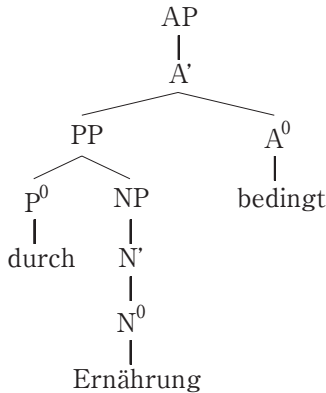
g. z-geschütztes y.

d. y ist von x gegen z geschützt

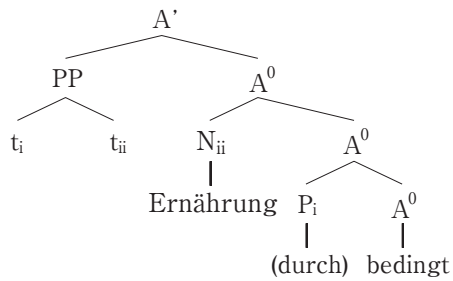
Wilss (1986)によれば、過去分詞形複合形容詞の第一構成要素は、(12a, b)のように複合形容詞の第二構成要素としての過去分詞の基となる動詞の能動文における目的語に相当する場合があると指摘している。しかし2価・3価動詞(13, 14)の場合は、過去分詞形複合形容詞の第二構成要素としての過去分詞の基となる動詞の項構造を動作および状態受動文に変換すると、動作および状態受動文で実現される前置詞句の補部と過去分詞が結合し過去分詞形複合形容詞を形成すると分析する。ただし、(15, 16)の例が示すように、Wilss (1986)は3価動詞の受動

- b. Die Allergie wird durch die Ernährung bedingt. Y wird durch Z bedingt.
 c. Die Allergie ist durch die Ernährung bedingt. Y ist durch Z bedingt.
 d. Die Allergie ist ernährungsbedingt. Y ist Z-bedingt.

(19) a. 深層構造



b. 表層構造



Noma (2011, 2013) では、前置詞句の主要部である前置詞が過去分詞に取り込まれ、その後名詞句が過去分詞に取り込まれるという抽象的な編入過程を提案する。この分析により、過去分詞が特定の前置詞のみを選択し、前置詞によって規定される1つの意味役割のみの編入が可能となることが表される。この語類は句構造から規則的に複合形容詞が生成されるため、生産性が高い上、文脈の助けがなくても複合語の意味は容易に推測できるという利点を持つ。

次に、能動文 (20a) から動作受動文 (20b) および状態受動文 (20c) までの項構造の交替が観察されるが、形容詞化する際に異なる意味を持つ付加詞と結合する過去分詞形複合形容詞を、Noma (2011, 2013) では形容詞的と分析している。形容詞的語類に対しても、Noma (2011, 2013) では項構造の交替メカニズムを考察し、そこから統語的語類との差異を導き出している。

(20) a. Die Frau schreibt den Bericht mit der Hand.

X schreibt Y {A(様態) / mit B(道具) / in C(場所) / für D(受益格)}.

b. Der Bericht wird von der Frau mit der Hand geschrieben.

Y wird {von(動作主) / A / mit B / in C / für D} geschrieben.

c. Der Bericht ist mit der Hand geschrieben.

Y ist {A / mit B / in C / für D} geschrieben.

d. Der Bericht ist wohlgeschrieben / handgeschrieben / ?bürogeschrieben / *nachtgeschrieben.

Y ist {A-geschrieben / B-geschrieben / ?C-geschrieben / *D-geschrieben }
geschrieben.

Noma (2011, 2013) では、統語的語類は動詞に最も近い項が過去分詞と一語化するのに対して、形容詞的語類は文中に任意に取り込まれた付加詞の一部が過去分詞と結合する点が決定的に異なる特徴であると述べられている。しかし、項構造の交替だけでは、どの意味役割あるいは付加詞の意味が過去分詞と結合するかを見極めることが出来ないため、Noma (2011, 2013) では Vendler (1967) による動詞の概念的な意味分類を基に、ドイツ語では主に達成動詞が過去分詞形複合形容詞を形成しうることを特定した上で、ACT を修飾する付加詞、あるいは語用論的な支えによって取り込まれる項が主題に対する一時的な質そして評価を含意する場合に限り過去分詞と一語化し過去分詞形複合形容詞を形成すると結論付けている。

Noma (2011, 2013) では、複合語内の過去分詞とその派生元である動詞との意味的な関連性が薄い過去分詞形複合形容詞についても (21) のように項構造の交替を考察することを提案している。

- (21) a. ??Das Sehen behindert den Mann. ?? 見ることがその男性を阻む。
b. ?Der Mann wird beim Sehen behindert. ?その男性は見ることに於いて阻まれる。
c. Der Mann ist beim Sehen behindert. その男性は見ることに於いて障害がある。
d. Der Mann ist sehbehindert. その男性は視力に障害がある。

Noma (2011, 2013) は、当該語類は複合語の第二構成要素としての過去分詞 (21d) と基となる動詞 (21a) の意味的な関連性が薄いため、統語的に能動文および動作受動文への変換が著しく制限されており、そのことがこの語類の語彙的な性質を浮き彫りにすると分析する。

第3節では、統語レベルで生成される過去分詞形複合形容詞の分析例を概観した。当該語類は、形態論の領域で統語論との密接な繋がりがパラフレーズによって指摘されたが、意味論や統語論の分野ではこの語類そのものが等閑視されてきた。そうした先行研究に対し、Noma (2011, 2013) は一石を投じるものであるが、依然としてどのような意味の付加詞と結合するのか、意味論的に特定するという課題は残っている。また、過去分詞形複合形容詞の分析が状態受動文における過去分詞とコピーラ構文における過去分詞の研究に対し、どのように貢献しうるかを明確に示さなければならない。

4 造語論研究の課題

本論では形態論の考察対象である造語論の研究史を概観した後、複合と派生の境界線上に位置する語類と統語レベルで生成される語類の分析例を基に、ドイツ語学における造語論研究の問題点を抽出した。

一見すると、派生や複合という造語プロセスによって作られた語類は、形態素という単位にまで分解することで、より正確に分析することが可能であるように見える。また近年では、生成文法を援用することで語の内部構造をより精密に分析し、それによってより正確な分類を提示することも可能になった。しかし実際には、自由形態素であるにも関わらず接辞のように振舞う語類、意味と形態構造のミスマッチが生じる語類、また統語レベルで生成される語類も観察される。こうした複合と派生あるいは形態と統語の境界線上にある語類に対して、先行研究では新たな概念を導入しその語類の特徴を記述するという試みがなされた。他方では、こうした曖昧さを除去するため、形態素分析だけではなく、造語プロセスの最終段階でその造語法を決定することも提案された。しかし、これらはいずれも曖昧な語類の造語法を規定することのみ主眼が置かれており、このような手法で造語論研究が今後大きく進展するとは言い難い。今後は、境界線上に位置する語類の形成過程にも着目し、どのような制限が付加されることで異なる語形成が生じるのかという根本的な問題を考察することが重要であり、造語論研究が形態論の枠内に留まるのではなく、音韻論・統語論・意味論・語用論などの研究に対し、積極的に新たな関連性の視点を提供しなければならないだろう。そうすることで、先行研究において看過されてきた形態領域の重要性を示すことも可能になる。

注

- 1) Duden (2006) では、*begrüßen* が不変化詞 *be-* によって形成された動詞であると分析されているが、*be-* を接頭辞と見なすこともある。
- 2) 各造語法の例：複合 (*Wortbildung = Wort + Bildung*)、派生 (*un + Ruhe = Unruhe*)、品詞転換 (*Fisch → fischen*)、逆成 (*Kauf > kaufen*)、語縮約 (*Uni < Universität*)、重複 (*Pinkepinke > Geld*)、語交差 (*Nescafé → Nestle + Café*)、不変化詞による動詞形成 (*grüßen + be → begrüßen*)。
- 3) 2.1. 節は野間 (2008) を、2.2. 節は野間 (2011) を加筆修正したものである。
- 4) 擬似接辞が語末に現れる場合は擬似接尾辞と呼ばれるのに対し、語頭に現れる場合は擬似接頭辞と呼ばれる。
- 5) S: 名詞、Adj: 形容詞、Num: 数詞
- 6) Adv: 副詞、F: 接中辞、P: 接頭辞
- 7) 行重 (1997) によれば、音節化はまず未派生の語彙項目に適用され、形態論的過程によって新たな音節環境が作られる。従ってある規則の適用後、接辞が添加されるごとに音節化規則が循環的

に適用される。そのため、*einmonatig* と *einmonatlich* の派生元である名詞 *Monat* の音節構造を先に分析している。

- 8) 本論文では、*-ig* 型と *-lich* 型の派生形容詞における競合関係がないため割愛されているが、形態的特徴と意味的特徴が一致しない語類は *-ig* 型の派生形容詞に限り多数観察される。
- 9) 過去分詞形複合形容詞とは、[X + 過去分詞] で形成される複合形容詞である。
- 10) 3節は Noma (2011, 2013) を加筆修正したものである。

参考文献

- 秋元実治 (2002). 『文法化とイデオム化』 ひつじ書房.
- Backer, M. C. (1988). *Incorporation : a theory of grammatical function changing*. Ph.D. Dissertation. MIT.
- Bußmann, H. (1983). *Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart: A. Kröner Verlag.
- Duden (2006). *Deutsches Universalwörterbuch*. 6. Auflage. Mannheim: Dudenverlag.
- Duden (2007). *Richtiges und gutes Deutsch*. Mannheim: Dudenverlag.
- Eichinger, L. M. (2000). *Deutsche Wortbildung. Eine Einführung*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Fleischer, W. (1972). „Tendenzen der deutschen Wortbildung“ *Deutsch als Fremdsprache, Zeitschrift für Theorie und Praxis des Deutschunterrichts für Ausländer*. Vol. 3 Leipzig : Herder Institute: 132-141.
- Fleischer, W. (1976). *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Fleischer, W. / Barz, I. (1995). *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Fleischer, W. / Barz, I. (2007). *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Gallmann, P. (1990). „Wortbegriff und Nomen-Verb-Verbindungen.“ *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*. 18. 2: 269-304.
- Grimm, J. (1826). *Deutsche Grammatik*. Göttingen: Dieterichsche Buchhandlung.
- Helbig, G. (1983). „Zustandspassiv, sein-Passiv oder Stativ?“ In: G.Helbig (ed.), *Studien zur deutschen Syntax*. Band 1. Leipzig: 47-57.
- Höhle, T. (1978). *Lexikalische Syntax: Die Aktiv-Passiv-Relation und andere Infinitivkonstruktionen im Deutschen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Höhle, T. (1982). „Über Komposition und Derivation: zur Konstituentenstruktur von Wortbildungsprodukten im Deutschen.“ *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*. 1: 76-111.
- Jackendoff, R. (1990). *Semantic structures*. Cambridge & Mass.: The MIT Press.
- Kühnhold, I. / Putzer, O. / Wellman, H. (1978). *Deutsche Wortbildung. Typen und Tendenzen in der Gegenwartssprache. Das Adjektiv*. Düsseldorf : Pädagogischer Verlag Schwann.
- Lachachi, D. E. (2008). „Zur Stellung der Halbaffigierung in der deutschen Wortbildung“

- Wortbildung heute*. Tübingen: Gunter Narr Verlag: 213-230.
- Maienborn, C. (2007). „Das Zustandspassiv: Grammatische Einordnung - Bildungsbeschränkungen - Interpretationsspielraum.“ *Zeitschrift für Germanistische Linguistik*. 35, 83-114.
- Maienborn, C. (2009). „Building event-Based ad hoc Properties: On the interpretation of adjectival passives.“ In: A. Riester & T. Solstad (eds.), *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 13. Stuttgart: 35-49.
- Motsch, W. (1981). „Der kreative Aspekt in der Wortbildung“ *Wortbildung, Wege der Forschung*. Band. 564. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft: 94-118.
- 野間砂理 (2008). 「ドイツ語における擬似接尾辞について」修士論文, 広島大学.
- 野間砂理 (2011). 「現代ドイツ語における形容詞派生の接尾辞について—接尾辞 *-ig* と *-lich* の共通点と相違点—」, 『エネルギー36』 39-57.
- Noma, S. (2011). „Partizipiale Adjektiv-Komposita in der deutschen Gegenwartssprache“ *Mapping zwischen Syntax, Prosodie und Informationsstruktur*. München: Iudicium Verlag: 134-146.
- Noma, S. (2013). „Die Partizip II-Adjektivkomposita im Deutschen -Syntaktische und semantische Beschränkungen des Wortbildungsprozesses-“ Doktorarbeit, Universität Hiroshima.
- Öhlschläger, G. (2008). Wintersemester 2008/09 Vorlesung: *Einführung in die germanistische Sprachwissenschaft. Theoretische und methodische Grundlagen*.
(<http://www.uni-leipzig.de/~oehl/lehreneu.htm>)
- Olsen, S. (1986). „Argument-Linking und unproduktive Reihen bei deutschen Adjektivkomposita.“ *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*. 5: 5-24.
- Pümpel-Mader, M. / Gassner-Koch, E. / Wellmann, H. (1992). *Deutsche Wortbildung. Typen und Tendenzen in der Gegenwartssprache. Adjektivkomposita und Partizipialbildungen*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Rapp, I. (1997). *Partizipien und semantische Struktur. Zu passivischen Konstruktionen mit dem 3. Status*. Tübingen: Stauffenburg Verlag.
- Schippa, T. (1978). *Lexikologie der deutschen Gegenwartssprache*. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Schmidt, G. D. (1987). „Das Affixoid. Zur Notwendigkeit und Brauchbarkeit eines beliebten Zwischenbegriffs in der Wortbildung“ *Deutsche Lehnwortbildung*. Tübingen: Gunter Narr Verlag: 53-101.
- Vendler, (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca & New York: Cornell University Press.
- Weinrich H. (1993). *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Duden Verlag.
- Wilmanns, W. (1899). *Deutsche Grammatik: Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch* Abt. 3, Hälft. 1. Berlin: de Gruyter.
- Wilss, W. (1986). *Wortbildungstendenzen in der deutschen Gegenwartssprache*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- 行重耕平 (1997). 『ドイツ語における音韻過程—理論と分析—』九州大学出版会.

Zur Analysemethode der Morphologie in der deutschen Linguistik

— anhand von Komposition und Derivation —

NOMA Sari

Die Forschungsgeschichte der Morphologie im Rahmen der Germanistik kann meiner Auffassung nach in drei Perioden eingeteilt werden. Erstens gibt es Grimms (1826) oder Wilmanns (1899) diachronische Untersuchungen, in denen die Bahnen der Wörter beim Wortbildungsvorgang aufgespürt und verfolgt werden. An zweiter Stelle sind die synchronischen Untersuchungen von Fleischer (1972), Weinrich (1993), Pümpel-Mader et al. (1992) und Öhlschräger (2008) anzuführen, bei denen produktive Wörter in phonologischer und morphologischer Hinsicht beschrieben und unterteilt werden. Als dritte Periode wird die der generativen Wortbildung angegeben, bei der Chomskys Generative Grammatik auf die Morphologie angewendet wird, vgl. Noma (2011, 2013), Motsch (1981), Eichinger (2000) und Gallmann (1990). In diesem Aufsatz wird der neueste Stand der Wortbildungslehre in den obenerwähnten drei Perioden anhand der Analyse von drei Wortgruppen betrachtet, nämlich Halbaffix, Ableitungsadjektive *-ig* und *-lich* und Partizip II-Adjektivkomposita. Dabei werden sowohl Ergebnisse als auch daraus erwachsende Aufgaben der Wortbildungslehre beleuchtet.

Innenstrukturen von durch Komposition und Ableitung generierten Wörter lassen sich durch die Zerlegung in Morpheme oder in den letzten Jahren auch anhand der generativen Grammatik präziser analysieren. Aber in der Tat werden problematische Wortgruppen wie Affix verhaltende freie Morpheme, die semantische sowie morphologische Struktur nicht miteinander korrespondierender Ableitungsadjektive *-ig* und *-lich* und auf der syntaktischen Ebene generierte Partizip II-Adjektivkomposita beobachtet. Diese Wortgruppen, die den vorliegenden Klassifizierungen nicht angehören, wurden einerseits mithilfe eines neuen Fachbegriffs aufgefasst oder standen als regellose lexikalische Wörter außer Betracht. Andererseits wurden Definitionen der vorhandenen Wortbildungsarten wie Komposition sowie Ableitung verbessert. Aber mit dieser Methode entwickeln sich nach meinem Dafürhalten die Wortbildungsuntersuchungen nicht mehr weiter, weil das Augenmerk sich nur auf die Bestimmung der Wortbildungsarten richtet. Außer der Spezifizierung der Wortbildungsarten ist es noch die Feststellung relevant, weshalb und auf welcher Ebene die Wörter, die nicht den regelmäßigen Wortgruppen zugehören, von den Wortbildungsregeln abweichen. Erst dann ist es denkbar, dass die Untersuchung der Wortbildung als ein Mittel zur Untersuchung von Phonologie, Syntax, Semantik und Pragmatik beitragen kann, und die bisherigen Unklarheiten unter dem morphologischen Gesichtspunkt aufgelöst werden können, sodass die Bedeutsamkeit der Morphologie hervortritt.